広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	電話の応答を聞いてその内容を類推する能力の発達について
Author(s)	伊左谷，平太
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 32 - 35
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045069
Right	
Relation	

児童言語生態合同調査・研究報告(5)

電話の応答を聞いて その内容を類推する能力の発達について

伊左谷平太

＜調査形式と方法＞

次の文は、電話で話しているようすを書いたものです。これをよんで、あとの問題に答えなさい。

―もしもし、山田ですが、……あゝぼく。

―うん、さっき。学校から帰ったところだよ。

―圭子（けいこ）、まだ帰ってないよ。

―うん、今、夕ごはんの買物に出てったよ。どこにいるの？

―デパート？

―へえ、目黒のおばさんに？　めずらしいね。

―おばさん元気そう？

―五時半ね。へいきだよ。夕ごはんのしたくは、おばあちゃんがしてくれるから。それに、おとうさんもきょうは、おそいって、朝、そういってたでしょ。

―じゃ、早く帰ってきてね。おみやげまってるよ。おばさんにもよろしくね。

(1) この電話は、誰（だれ）とだれが、何の用で、話をしているのでしょうか。

□と□

何の用で（用件（けん））

(2) 文をよんで、「ぼく」の家族を書きなさい。

(3) その人たちは、今、何をしているでしょうか。

(4) 五時半というのは、何の時間でしょうか。

（作問東京・聖徳小学校　教諭　松村実葉枝）

＜調査対象＞

東京・四谷第一小　二年　二四名
〃　町田第三小　三〃　三六〃
横浜・日吉南小　四〃　四一〃
藤沢・汲沢小　五〃　三八〃
横浜・三ッ沢小　六〃　三八〃

＜調査意図＞

就学年令時以上の子どもたちが、電話の用途を知らぬわけはない。また極めて、辺鄙な土地を除いては、電話の経験があるだろう。そんなところから、採用してみた調査形式なり、方法であるが、直接意図は、ことばを操る意識とその力などというと、なんでもかでも、ことばの技能的扱いと思ってしまいがちだが、よく考えてみると、この調査がかりたような場面も実際には必ずあることであって、会話の一方だけが聞えて、他は聞えない。両方が聞える時以上に、他方が聞えないだけに、何を内容として話しているのかを聞き耳を立てるともなしに立ててしまっている場合があるものである。こうした場合は、より表現を効果あらしめるために、ことばを操るなどというよりよい、より以上の選択的・効果的・技巧的技能とは異った、少くとも、これだけはといった最低的・規則的・基本的な準拠を要請する。しかし、これもまた、より理解をふかめるための技能にちがいないし、却って、ふつうに技能的だと思われているものより、重要視しなければならぬ本来的なことばそのものがもつ機能と考えられる。ことばを聞いて考える。これこそ、ことばを操ることの本義ではなかったろうか。ことば道具観からそういうのではない。ことばは意識を触発し、意識は、ことばを呼ぶ、この触発・誘発の在り方を発達の具合を覗こうとしたのである。

＜調査結果＞

まず表Ⅰの如く、問(1)のうち、誰と誰とが電話しているかの正答が、学年発達に従い順調なことは、嬉しいことである。だが、この問題の適応度から言うと、四年と五年との間に、開きが見られることは注意してよいことであろう。誤答の例も五年になると、殆んど数少くなる。まあ、常識程度に答えられる年令が、こゝにあった。けれども、三年・四年のこの誤答例が、散ら

表Ⅰ

誰と誰とが電話しているか	2年	3年	4年	5年	6年
A 山田君（ぼく）とお母さん（正解）	41.6%	47.2	51.2	73.6	89.4
B 〃 けいこ	8.3	13.8	9.7	13.1	2.6
C 〃 お父さん	0	13.8	19.5	2.6	2.6
D 〃 友だち	8.3	11.1	4.8	0	0
E 〃 おばさん	4.1	5.5	4.8	2.6	0
F 〃 おばあさん	0	11.1	2.4	0	0
G 〃 おにいさん	0	2.7	0	0	0
H その他					

ばることも考え合わさなければなるまい。

しかし、それも、二年生から見ると、一つの発達だともいえる。二年生では誤答をあれやこれや思いつくことができないともいえる。それに特に、二年生は〃その他〃として、言わねばならぬことがある。〃山田君（ぼく）とお母さん〃と正答したものが10／24人で、続いて多かったのは、実は〃ぼくと山田君〃の9／24人であったのである。但しこの例は、二年生にのみあらわれたので、表Ⅰの見出しには掲げなかったのである。表ⅠのDの〃山田君（ぼく）と友だち〃については疑問がある。二年生に関する限り、〃ぼくと友だち〃と表記しているので、〃ぼくと友だち〃のこの〃友だち〃は先の〃山田君〃の場合もあり得る。もちろん、山田君以外の友だちかもしれないが、付記しておく。

二年生以外の〃その他〃については、三年生ナシ、四年生は〃おねえさん〃1／41人。〃家族〃2／41人がある。五年生では〃デパートにいる人〃1／38人。〃電話の相手〃1／38人。六年生では、〃旅行に行っている人〃1／38人。〃山田君と？〃1／38人。この？はどういう意味なのかわからないが、とにかく、そう表記されてあったものということである。

つぎに、表Ⅱの如く、問(1)のうちの〃何の用で〃に対する解答を学年別にしてみると、学年発達に従い、解答の散らばりが、順に集中して行くことがわかる。おそらく、さまざまな小異を捨てゝ、集約することを知り始めると見たい。それだけに、二年から四年への解答の拡散は注意される。つまり、いろいろに解答が出せることを知る段階なのであろう。二年生に三例、四年に一例〃けい子に用事〃という解答があるのはおもしろい。電話の会話文の中にある「けい子、まだ帰ってないよ」に引きづられたか、誘発されたにちがいない。これを用件の中に含むとしてよいか、わるいかは、厳正には困難である。母親は、この電話は、けい子に告げたい、あるいは、電話に出るのはけい子を予想していたとしても、決してあやまりどころか、解釈としては深い。但し、いま筆者がするような分析的思考でそう答えたとは思われない。

表Ⅱ

〃何の用で〃（誰と誰の正解者のみ）	2年	3年	4年	5年	6年
1.けい子に用事	3		1		
2.夕ごはん	3	6	4		
3.今の自分の様子	2	6	6		
4.今の家の様子（かえる時間）	1	3	6	24	32
5.2～4を含めたもの		1	1	5	
6.どこにいるという用		1	1		
7.おみやげ			1		
8.無答	1				2

おそらく直観的に思ったのであろう。もちろん、この問題としては、「誰と誰が、何の用で」と問いかける以上、誰と誰とに想定される。ぼくと母親間の用事でなければならなくなるから、けい子に用というのは除去されてしまうことになろう。余計なことだが、このような分析の上に立って、小学生が回答しているとは考えられないから、なおさらこんなところにもペーパーテストのむつかしさがあったことも付記しておきたい。

なお、〃誰と誰と〃を既にあやまっている解答者の〃何の用で〃の解答例に、想像を含んだものがある。これは学年を問わない。例えば、〃おばさんが来る〃〃おばさんにあう〃〃今日来てくれということ〃〃旅行から帰るから、むかえの時刻を知らせる〃等々である。その想像が先か、誰と誰とを間違えたから、そう想像せざるを得なかったかわからないことではあるが、考えさせられるところである。

つぎの問(2)(3)をまとめてみて、表Ⅲをつくった。但し、問(1)の正解者のみ。

表Ⅲ　今，誰は何をしているか
（但し誰と誰との正解者のみ）

家族＼学年		2	3	4	5	6
ぼく	母親と電話		9	2	13	20
	るすばん			2	3	5
	帰ったばかり			1	1	2
	家にいる			1		
	無答				5	7
母	電話	1	6	2	6	13
	買いもの（デパート）	4	2	6	9	13
	仕事			1		
	おばさんの家			2	5	3
	おばさんの手伝い	1				
	わからない	2				
	無答	1		3	2	5
父	仕事（会社）	6	8	11	19	28
	出かけている					2
	わからない					2
	無答			5	2	2
けい子	おつかい（買い物）	4	5	7	8	23
	学校			5	8	10
	遊び	1	2			
	まだ帰らない				3	
	無答				3	1
祖母	買いもの	1		5	6	11
	ごはんの支度	2	5	3	7	11
	家			1	3	
	留守番	1				
	学校				1	1
	デパート	1		2		
	なんにもしていない		1			
	わからない					4
	無答			2		3

表を見て、問題点は三つほどあるように思う。その前に、整理担当者の連絡不行届きで、〃山田君（ぼく）〃を含ませるか否かの点で空欄が出来てしまったことをおわびする。さて、〃父〃の欄は問題はないから、母とけい子と祖母の欄についてである。共通して言えることは、五年からそれぞれの現在何をしているかという見方が烈しく分化していることであろう。その傾向は四年から始まっていると見るべきなのであろう。特に、けい子と祖母との関係で考えられているところがあるのはさすがである。というのは、けい子は、学校にいるというのが、二三年ではなく、四五六年にかなりの数であること。その関係で、祖母は買いものに出ているとするのだと思われる。この祖母が買いものに出ているとするのが、二年に一例あるだけで、三年は皆無であることが、それを裏書きしている。これは、おそらく

——うん、さっき、学校から帰ったところだよ。

——圭子（けいこ）、まだ帰ってないよ。

——うん、今、夕ごはんの買物に出てったよ。

の右の会話の部分を、圭子は学校から帰宅していない。すると、買物に出てったのは、別人であり、のちの、

——：：夕ごはんのしたくは、おばあちゃんがしてくれるから

の語と関係させて、おばあさんを買物に出したことになる。

もっとも、圭子をおつかい（買い物）に出している方が、数としては多いし、二年から上級学年にかけて、ずっとある。そのために祖母が夕飯の支度をしているというのが、略同数程度にある。だとすると、厳密には、まだ圭子は買い物から帰らない。たったいま夕ごはんの買い物に出て行ったばかりだからとしなくてはならないのだが、そうするためには、

——圭子はまだ……

——うん、今、夕ごはんの買い物に出てったよ。

の、時間性をそれに合わせて聞き取っていなければならない。そう聞くためには無理を感じる者は、この考えはとれない。こう考えて圭子は学校にいるとしたか、どうかは明確ではないが、この方が、四・五・六年にならないとあらわれなかったのは、推理を必要とするからであろうか。

ただ、仮りにではあるが、一見、不調和だと思われるこの時間性も、次のように会話をおいて見ると、案外、時間性もすんなりとしてしまう。

（母——圭子はもう帰っていない？）

ぼく——圭子、まだ帰ってないよ。

（母——出るとき、圭子に夕ごはんの買物たのんでおいたのだけどー）

ぼく——うん、今、夕ごはんの買物に出てったよ。

これは、母が、圭子の現在を予測し得る前提をもつ立場を設定してみたのである。もちろん、こういうふうに読んでいたからとはいわない。圭子はおつかいに出ていたと読んだ者が、学年を問わず多かった理由は、おそらくもっと簡単なことであったろう。でも簡単だといえば、圭子は学校だと読むことも、同様である。にもかゝわらず、圭子をおつかいに出して読んだのは、イメージだったのではないか。もし、次のようだったら、どうであろう。

——圭子姉さん、まだ帰ってないよ。

この電話の主の〃ぼく〃が、圭子と呼ぶか、圭子姉さんと呼ぶかで動くのではないか。すべてがイメージだとはいわない。〃ぼく〃がさっき学校から帰ったといっているのに、〃ぼく〃の妹である圭子が、まだ学校から帰っていないはずはない、それがこのような逆推理になるのか、並行してそう思われているのか、それはわからないけれど

も、こうした身分的イメージが、前提になるのではなかったろうか。この考え方は〃祖母〃にもあてはまる。二・三年で〃祖母〃を買い物には殆んど出していない。もし、この考え方が当っているとなると、圭子は学校にいるとする考え方の方が、イメージ思考から離れた、ことばによる考え方としてよいだろう。母の欄における〃おばさんの家にいる〃なども、考えすぎだろうけれど、考えすぎが出来る段階に入ったことを認める必要があったのである。同じく、父の欄でも、六年生で〃わからない〃としたことを発達とすべきであることも教えられる。

〃わからない〃ということが〃わかる〃ようになったのである。

問(4)に関する、五時半というのは、何の時間でしょうか。をまとめて表Ⅳに示す。

この正解は、母の帰宅時間か、夕飯の時間か。文の前後関係から、母の帰宅時間ととる方が一般的であろう。ではなぜ夕飯の時間とする者が、どの学年にも少しずついるのであろう。おそらく

表Ⅳ　五時半とは何の時間か
（但し，〃誰と誰と〃の正解者のみ）

何の時間＼学年	2	3	4	5	6
母の帰宅時間	6	6	15	22	26
母をむかえに行く時間	0	0	0	1	1
夕ごはんの時間	2	4	2	3	4
夕ごはんの支度する時間	0	0	0	4	0
今電話をしている　〃	0	0	0	1	0
おばさんが来る　〃	0	0	0	1	0
5時半までに帰えられない〃	0	1	0	0	0
けい子が買いものに行く〃	1	1	0	0	0
無答	0	1	0	1	2
その他	0	5	1	0	1

―五時半ね。へいきだよ。夕ごはんのしたくは：：

とある、夕ごはんの文字からの印象か？　それに加えて、話手は

―五時半ね。へいきだよ。

とある。へいきだよをどう受けとめたかによって、動いたとも考えたい。いま一つ、質問をふやして、このへいきだよとあるが、何がへいきなのかを問うてみたかった。もし、五時半が夕食の時間だとするなら、へいきだよは、自分の腹具合と相談の結果ということになろう。ただし、これでは、何のために、―それに、おとうさんも、きょうはおそい：：：ということばを継いだかが生きて来ない。何のために、〃それに〃なのかわからない。

母の帰宅時間とし、それが帰宅時間だから夕ごはんの時間が五時半よりもおそくなると、母が気づかっているのに対して、同情的、あるいは元気づけにいう〃へいきだよ〃の日常性みたいな現代感覚で把えると、このところは、すらすらと運ぶように思える。〃へいきだよ〃の前者は、〃だいじょうぶだよ〃あるいは〃ＯＫだよ〃と同義的であり、後者は、〃心配するなよ〃が当りはしないだろうか。つまり、前者なら自己の状態に対する了解をあらわし、後者はお節介に対する払いのけといった区別が立てられるように思う。

極めて微細なニュアンスといえるかもしれないけれども、ことばを操るということは、大げさなことばの運用技術と思いがちなことに対する反省が得られた。こうしたわずかな人と人との感情関係の把え方によって、ことばは否応なしに操られているのであろう。ことばを主にしていうならば、そのことばをなかだちとして人間関係・場面関係を成立せしめることだと思い至らせられたということである。